

「たえさん、利助さんから頼みがあるようだから、ここに居てくれませんか」

このまま、旅立とうと思つていた矢先に、何の頼みなのか、もう高木村には何の恨みも未練もない。たえは、このまま立ち去りたい気持ちでいっぱいだ。

「私には、どうすることも」

「まあ、良いから座ってください」

そう彦輔がいうので、しかたなく襖を閉めこちらを向いて座つた。

それまで神妙に座っていた利助が、たえの前まで進み出て、頭を畳にこすりつけるほど下げる。

「たえ様、私を弟子にしてくださいませんか！」

目をまん丸にして「何事なのですか」と問うたえに

つかない。

「たえさんといわれたか、私は利助の母で久米と申す者です。初めてお会いしますね。あなたが神五郎池の拡張を申し出たと伊平さんから聞きました。この付近は水の下に沈むかも知れないともいわれた。その時は、聞く耳も持たずと思つたし、もし、あなたがうちに来て、講釈並べて私たちを説得しようものなら、叩きだしてやろうとも思つた。じゃがあなたは説得するどころか、うちの堰を治して黙つて帰つて行った。私らの気持ちを十分知りつくしておるのじゃろうと感じたよ。その上、利助がこの在りようじゃ。もう私には反対する理由もない。あんたの好きなようにすれば良い。ただ、利助の気持ちだけは受け

利助は頭をさげたまま、畳に向かつて叫ぶ。

「私は、一生、百姓をするつもりがありません

でした。でも侍にも商人にも興味はなく、毎日、

百姓を続けるしかなかったのです。でも、あなたの

堰を治す手際の良さを見た時、これが自らの進

む道と決めたのです。少々、年は食うとりますが、

一生懸命励みますゆえ弟子にしてください、お願い

します」

利助の懇願は真剣そのものだ。

「す、少し待つて下さい。私は弟子など持てるよう

な器ではございませんし、父に叱られますので、ど

うぞお引き取りを」

完全に混乱していた。何がなにやら、全く整理が

てくれまいか、よう働く息子じゃ。」

たえは、話を黙つて聞いていた。今日、新田村の

人たちに頭を下げてでも許されなければ村役人に

出頭して、池はできないから藩主が決めた年貢の

免除は必要ないと話すことを心に決めていた。

それにしても、お久米さんの決断に至るまでの

苦悩は想像を越えるものに違いない。百姓が先祖

代々の土地を失う辛さは、何事にも耐え難いこと

は誰よりもわかつているつもりだ。

「お久米さん、気持ちには泣きたいほど嬉しい。でも

私は常々から百姓を泣かしてはならぬと父から

教えられて来ました。もしも、あなたの申し入れを受

けたら師匠である父に縁を切られるかも知れません。

ですから、先祖代々の田畑を手放してはなりません」

お久米さんの目が潤んでいた。

「あなた、成りは男じゃが、優しい子じやの、でもの、息子と決めたこと。これで上流も下流も苦しんで済むんじゃない。先祖も喜ぶ。そのために、たえさん、あなたの力が必要じゃ。まだ、工事は始まつたらんのじゃろ、今からが、あなたの腕の見せ所ではないのかい」

「お久米さん」

たえの押し殺したような声を、かき消すようにに庭先で蟬の鳴く声が始まった。

しばらく聞き手となっていた彦輔は、たえの方に身体を向けて座り直す。

利助とお久米さんは、たえの手を握り、何度も「ありがとう、ありがとう」を繰り返した。

三人が笑顔で話している中、たえだけは硬い表情が崩れない。そして「あ、み、だ、によ、ら、い」とつぶやく。それに気づいた彦輔が「なに」と尋ねると、「なんでもない」と向こうを向いた。

お久米さんたちが帰った後、大きな仕事が残った。それは、後藤芝山に次第を報告することと、新田村と高木村に説明して、今後の予定を決めなければならぬことである。彦輔は思いついたが吉日と、すぐさま芝山のもとへ駆けつけた。

芝山は「今日は良き日じや」といつて心から喜んでくれた。その上、新田村と高木村の寄り合いに立

「たえさん、二、三日でできる仕事ではないのですよ。一年以上かかる大事業なのです。工事をするために役に立つ助手が必要ではないですか、利助さんを弟子にされたらいかがか？」

沈黙があつた。お久米さんは背中を丸めて下を向き、利助さんは、歯を食いしばり、たえを直視できないのか、中空をにらんでいるように見える。

たえが、おもむろに目を上げる。

「私には弟子をとるなど身の丈には大きすぎる。かといつて、彦輔のいうとおり大事業を成すためには私一人の力など取るに足らぬ。利助さん、技術は私が教えるゆえ、仲間として手伝ってくれまいか、それなら父も許してくれるだろう」

ち会うとまでいつてくれた。彦輔は心強い後ろ盾ができた。

その後、新田村の菊造の屋敷で寄り合いが行われた。新田村から五人、高木村から五人そして後藤芝山と彦輔が立会人として参加した。予定していたとおりの工事ができることよって両方の村に大きな利がもたらされることが報告された。

彦輔からは工事が完成すれば、お久米さんの家と田畑が水の下に沈んでしまうこと、お久米さんの息子、利助がたえの助手として工事の指揮をとることになったことも皆に伝えられた。

新田村の衆はお久米さんの悲痛な決断に感謝した。自分たちなら、そのような決断ができたであろう

か。

新田村の一人から、お久米さんの家を新しく建てられないかと提案され、そこにいた全員が「それは良い」と賛同した。そして土地を探して開墾し新しい家を皆の手で建てなおすことが決められた。その友好的な中で一つだけ、問題があった。それは約定である。約定とは決まったことを書面にし、署名する契約書のようなもの。

何が問題かという、新田村と高木村の十名とも字が書けないし、読めない。自分の名をひらがなで書くのが精いっぱいなのだ。それでは決まったことが本当に書かれているか後の世に責任が持てぬというのだ。

皆が悩んでいると、後藤芝山は彦輔に絵図面をも

つてくるよう指示した。

この寄り合いのために、たえから預かった大事な絵図面である。たえが苦労してつくりあげた完成予想図だ。彦輔は、その絵図面を持ってきて芝山の前に広げた。

すると芝山は矢立と云って、筆と墨壺が一体になったものから筆を取り出すと、その絵図面の中央に太くはつきり縦の線を書き込んだ。

「先生」

思わず叫んでいた。たえが何日もかかってつくり

あげた絵図面なのに。

芝山は、その絵図面を手にとると、全員に見えるように両手で広げた。

たのである。

世界の中で狭い国土と急峻な地形を持つ日本は、雨が降ると多くの水は短時間で海に流れ出してしまふ。なぜ、そのような国が一〇〇パーセントに近い水道の普及と多くの水が必要とする農業振興ができたのか。それは水を溜めるといふ土木技術のおかげといえる。多くのため池やダム、水路を建設した経験は次なる技術を生み、世界一といわれるまでに成長したのだ。

さて、高木村の神五郎池拡張工事は始まり、たえが設計した堰堤に石が積まれていった。利助もたえの教えを良く守り、村の人足たちをうまく導いて

「この絵図面には、たえさんの努力の結晶が書き込まれておる。だから信頼できるものじゃ。ここにおる者は、この絵図面を見れば、これがどこかわかるはず。そして私が縦に線を入れた。これは、何事も半分だということ、造ること、使うこと、治すこと、全ての二つの村が半分半分じゃということである。これなら字が読めなくても何が書いてあるか誰でも一目でわかるはずじゃ」

全員が大きく頷いた。誰も異存はない。その絵図面に一人ひとりひらがなで名を書き込み、親指に墨を塗って黒印の替わりとした。

ここに、高木村神五郎池拡張工事の約定が交わされ、本格的な堰堤の工事が開始されることになっ

いる。

たえは、工事が始まってからお久米さんの家に居を移して、利助とともに工事の進捗管理を行っていた。

そのような光景を耳にした藩主の松平頼恭は、川幅を広げる工事を高松藩の治水事業として実施することを決定し、全てが順調に進んでいた。

暑い夏は峠を越えて九月も終わろうとしていた。

この年は、まことに雨が少ない年になるようだ。もし、殿さまが年貢の免除をしていなかったら本当の飢きんだったかも知れない。そのような年に土木工事ができたのは奇跡だった。

ある日、数百人が働く工事現場を見下す丘の上

に一人の男が立っていた。日陰にも入らず、ただ日が暮れるまで工事現場を眺めているだけである。

その男は、作業が終わる頃を見定めると、丘を駆け下り、人足たちの間を縫うように、人足頭が集まる場所を目指しているようだ。

石積をよじ登った男は、絵図面を眺める男たちに近寄る。男たちの中には、たえの姿もあった。

たえが視線を感じて振り返ると、そこに立っている男は、一日も忘れない、たえにとつて唯一無二の父であり師匠でもある高屋の権左であった。

「父さん！」

一陣の風が吹き、砂ぼこりが舞う。男たちは絵図面が飛ばされぬように必死で押さえている。

(以上5月20日放送分)